

# 岩瀬文庫蔵『胡琴教録』片仮名本について

——真名本の伝来・続考——

森 下 要 治

## はじめに

鴨長明の琵琶の師匠として知られる中原有安が残した言談を集成した琵琶作法書『胡琴教録』（以下「本書」）の研究を進めている。本書は早く群書類従所収本（以下「類従本」）によってその存在が知られ、平成七年には南北朝期書写と目される書陵部蔵本（伏見宮旧蔵本、以下「伏見宮本」）が解題を付して全文翻刻紹介された。この二種類はいずれも漢字交じり平仮名の表記という点で共通している。この間、昭和十七年に猪熊信男氏蔵真名宣命書本（下巻のみ、以下「猪熊本」）が古典保存会より山田孝雄氏の解題を添えて複製され、様々の状況に照らして、こうした真名宣命書が本書の本来の姿であろうと推定されるに至っている。真名宣命書本を本書の原態とする考え方にはなお慎重を期する立場もあるが、有力な反証が示されない以上、

今のところ真名宣命書本を本書の原態と考えておいて問題ないと稿者は考えている。ただ、いかなる議論がなされようと、真名宣命書本が極めて重要な伝本であることに疑いを挟む余地はない。

こうした立場から稿者は前稿<sup>(1)</sup>において、西尾市岩瀬文庫に蔵される、猪熊本とは別の真名宣命書本（以下「岩瀬真名本」）を紹介し、近世において真名宣命書本が、猪熊本・岩瀬真名本を含めて少なくとも三本伝流していたことを実証した。本稿はこれを承けて、真名宣命書本と漢字交じり平仮名本との接点を示すものと考えられる岩瀬文庫蔵片仮名交じり漢字表記の一本（以下「岩瀬片仮名本」）を紹介するものである。

## 一、書 誌

袋綴装、二巻一冊。しかし第五十三丁と第五十四丁の間

でやや小口に乱れが生じており、ここで上巻部分と下巻部分に分かれていることから、もとは上下二冊本で、のち装丁を改めて合冊したものと考えられる。法量は、縦二十三・七糎、横十六・八糎。表紙は楮紙で、左に「胡琴教録全」と打付書で闊達に大書されている。料紙は楮紙ですべて九十七丁。上巻部分五十三丁、下巻部分四十四丁である。内容は伏見宮本にほぼ合致するが、先に述べたように伏見宮本は漢字交じり平仮名表記、岩瀬片仮名本は片仮名交じり漢字表記と、その表記方式が著しく異なる。後述するがこの表記形態の違いは、岩瀬片仮名本が「練習」(奥書)のためにあえて表記を改めたことから生じていると考えられる。本文の実際数例を示す(朱書き入れは、見消のみを表示する)。

有こみんとてこひのこしれとそうにて

(岩瀬片仮名本第五十七丁表三行目)

珍しく平仮名書となっている部分だが、このままでは通じない。伏見宮本・類従本対応箇所は次の通り。

・有とみんとて、こひのこしれと、そうくにて、

(伏見宮本)

・有とみんとて、こひのこしれとも、そうくにて、

(類従本。但し濁点は無視した。)

岩瀬片仮名本はこの傍線部分を誤読し、何らかの事情で踊字「く」を落としたため文意不通となり、漢字を交え

ようがなかったのだろう。「有」字右に「本ノマ、」と記して、そのことを表している。

・きちなきともからをもらはすつらなるへきにかならす  
(岩瀬片仮名本第七十五丁表三・四行目)

・きちなきともからをもらはす、つらなるへきにあ  
らす、  
(伏見宮本)

・こちなきともからをもらはす、つらなるへきにあ  
らす  
(類従本)

ここも事情は前の例とほぼ同じだろう。脱字を含めた誤写によつて、文意不通となったのだ。ただこの二例ですである程度推測できるが、岩瀬片仮名本は、類従本よりもむしろ伏見宮本に近いのである。特に後の例では、伏見宮本の訂正箇所をもそのまま受け継いでおり、重要である。

先稿で述べておいたが、本書上巻第十一篇「楽曲」の中には、伏見宮本と類従本で談話の順序が異なる部分が一箇所あり、本文系統を見分ける指標の一つとなる。<sup>2)</sup>もはや挙例はしないが、その談話順序も岩瀬片仮名本・伏見宮本が共通しており、これらの事実から岩瀬片仮名本の書写作業は、伏見宮本系統の本文に基づいているといえる。従つて本来的にはこれも平仮名本の系統、それも群書類従本系統でなく伏見宮本系統に属するもので、表記方式の違いは、従来知られている本文系統を左右するものではない。請求番号は「六三〇六・七〇・六九」、第一丁表に「岩瀬文庫」の

蔵書印がある。

奥書は四種が記されている。判読しにくい部分もあるが、以下に翻刻を試みる。私意により読点を施した。

#### 奥書1

此一巻、菊亭大納言公規卿令所望書写者也、

延宝六戊午年極月五日書写了、

一校相済

從二位實満

(第八十九丁裏、すべて朱書)

#### 奥書2

本云

以左近大夫將監中原光氏之秘本、令書寫之、秘書之間、荒涼之人有其憚、仍以女性令書之間、僻字等多、得其意追可書改之、

左近少將判

(第九十六丁表)

#### 奥書3

此書、本紙者以日本言葉平仮名被撰出之教、讀者一應而難得其意、仍今為練習次漢字交行(本)仮名、見安様写之、但未解其意之處者、如本紙、若又於直真(ママ)君字之所、愚見之謬有之乎、希後学正之、仍奥書如件、

于時宝永七秋九月中旬 從五位上左京少進秦昌際

#### 奥書4

寛政四年十一月令書写了(花押)

(第九十七丁裏)

從四位上豊原朝臣時習蔵書

(第九十六丁裏から第九十七丁表)

括弧付きの傍書は原本朱筆である。

若干のコメントを加える。岩瀬片仮名本全体を見渡すと二種類の筆跡がある。一つは本文全体を書写した几帳面な筆跡であつて、奥書1から3がこれと同筆である。いま一つは表紙の伸び伸びとした外題であり、この闊達さは奥書4と近似する。こちらは同一の文字を比較したわけではないから確証はないが、まず間違ひなからう。すなわち外題と奥書4とは同筆と考えられる。奥書4には「令書写」とあるから、奥書4の主が誰かを使って本文全体を書写させたと判明する。問題は本文と奥書1から3の関係だ。奥書2は本書平仮名本すべてに共通するものであるから、これも問題ない。内容上奥書3が書写奥書と見られるが、これを見ると誤写と思しい部分や異文注記と思われる朱傍書が存在し、しかも異文注記は本文並びに墨書奥書1から3と同筆である。とすると本文・奥書(1から3)・朱の異文注記がすでに親本に記されており、これを奥書4の主に依頼(もしくは命令)された人物がすべて書写したものと考

えられよう。すべてが書写されたのち、依頼者（もしくは命令者）が外題と奥書4とを記したのである。その人名は詳らかでない。

また上巻には若干、下巻には多量の朱書き入れが存する。これも本文と同筆である。次節以下に奥書の問題とあわせて論ずる。

## 二、奥書と朱書き入れについて

まず奥書3から検討する。

右のように考えれば、岩瀬片仮名本は寛政四（一七九三）年書写、その親本は宝永七（一七一〇）年に書写されたものと判明しよう。奥書3末尾「從四位上豊原朝臣時習藏書」の一行はやや問題を残す。奥書3自体は前節で述べたように寛政四年の岩瀬片仮名本書写時点ですでに記されていたはずだが、この一行はどうか。奥書3の書写者署名のあとに記されているのだから、奥書そのものではあるまい。可能性は二通り考えられる。問題の一行が親本にすでに記されていたか、岩瀬片仮名本書写の際に覚えとして書き足されたものか、ということである。しかしいずれにしても、「秦昌際」が宝永七年に書写した親本を「豊原時習」が所持していたことは動くまい。

次には奥書1と3との関係について考える。これに先立つ

て、まず奥書の内容を確認しておこう。

奥書1は次のようである。まず「此一巻」という言い方から、一巻本の奥書であるとわかる。この点、上下二巻である本書の通常の様態とは事情を異にする。一巻本といえば、最初に記したように下巻のみの猪熊本のような真名本が思い浮かぶ。続く部分の「令所望書写」はやや問題である。「菊亭大納言公規卿」は、「令所望書写」とどういう関係にあるのだろうか。要は公規が所望したのか、公規に所望したのか、という点にある。こうした問題設定は「此一巻」の所持者を特定することに繋がる。微妙なところであるので、具体的な検討は後にまわす。しかしどちらの意味に取っても揺るがないのは、「實満」なる人物が「此一巻」に関係したということであろう。これによって「此一巻」を仮に「實満本」と呼んでおきたい。「一校相済」の内実はよくわからない。「此一巻」書写後、校合を済ませたというのだろうか。あるいは「此一巻」を用いて校合した旨を意味するとも考えられる。保留しておきたい。

次に奥書3。「此書」つまり本書はもともと平仮名であったが、すぐには意味が取りにくい、そこで「漢字交行仮名」に改め、「見安様」に写した。理解できない部分は親本のままとした。誤りがあるうから後学に訂正を期待している、というのであろう。すなわち平仮名本本文を、書写段階で漢字と片仮名の表記に改めたと云っているのだ。

奥書1は朱筆であるから、朱書き入れとの関係を考えるべきであろう。上巻部分については、漢字の読みや平仮名本の異文を傍注したものが散見する程度である。ところが下巻部分に移ると、朱書き入れの量が一気に増す。数例を示す。まず下巻部分最初の書き入れである。

附讀假名、以下各為小字（第五十五丁表三行目右）

この注記が付された箇所、墨書本文は「可然會ニハ」とあって、「ニハ」文字の右側に小さな朱○印が施されている。「ニハ」のような付属語や漢字の送り仮名にあたる部分が以下すべて「小字」である、と指示しているのである。この指示は、宣命書の表記方式とほぼ同じである。

可懷中也（同右）

この部分の墨書本文は「懷ニ持ヘシ」とあるが、この五文字の左には朱見消符号が施されており、墨書本文を書き入れのように改めようとする指示であろうと考えられる。

自後見之（第五十六丁裏三行目右）

墨書本文は「ウシロヨリコレヲミルニ」となっており、右の例に同じく、朱見消符号が施されている。真名文風の表記に改める指示であることは明白である。下巻部分の多量の朱書き入れは殆どがこの調子であり、特に一番目と三番目のような注記は、真名宣命書を念頭に置いたものとししか考えられない。そこで真名宣命書の猪熊本によってこれらの箇所を徴すると、次のようである。

・可然會尔波

・可懷中也

・自後見之

このように岩瀬片仮名本朱書き入れと猪熊本文とが一致する。ここにはごく単純な例を挙げたが、その他の書き入れもおおむね同様の傾向にある。これによって先の奥書1に戻ると、この奥書と下巻部分朱書き入れの多くは対応関係にあり、「此一巻」とは真名本（下巻）を指すものと断じて良いだろう。つまり奥書1は異同注記のもとなつた真名本宣命書本の書写奥書と考えられるのである。下巻部分の朱書き入れの多くは、延宝六年に「實満」なる人物が所持した真名宣命書本によるものであった。ところでこの朱書き入れと奥書1とはいつの段階で記されたものか。もし親本書写の段階で施されたものならば、奥書3（親本の書写奥書）に何か触れられてもよいはずだが、それを思わせる記述は奥書3には見出せない。従って奥書3が書かれてから後に書き入れられたものと考えておくが、更なる時期の特定は、今のところ困難である。

次節においてはこの朱書き入れの検討を進め、「實満」が書写した真名本の内容とその素性について考えてみる。

### 三、「實満本」の内容

まずは岩瀬片仮名本下巻朱書き入れの異文注記と、現存真名宣命書本文とを比較するところから始めなければならぬ。先に述べたように真名宣命書本としては、猪熊本と岩瀬真名本の二本が確認されているわけだが、結論から言うと岩瀬片仮名本の朱書異文注記は、極めて粗い。確かに書き入れの量が多いが、その異文注記をすべて生かしてもなお現存真名本の全体像を復元できるわけではないのである。この書き入れの粗さが、校合作業の粗さを意味するのか、あるいは「實満」書写本の様態に起因するのかが問われなければならない。

実際の検討に移る前に岩瀬真名本について要点だけを述べておけば、恐らくは石清水八幡宮祠官家の田中家が所蔵していた本（現存を確認できず。以下「田中本」）を親本として書写されたもので、これに猪熊本もしくはその忠実な複製本を綿密に対校したものである。親本の田中本は微差を生じるものの基本的に猪熊本と同系統と見なして良い。前節ですでにいくつか例示して説明を加えたが、伏見宮本系統の平仮名本に基づく本文が、朱書き入れによって真名本文に戻される場合が多い

・ しっかりとてしきりかくへからず、これも時にしたか

ひ、座によらざる事、

（伏見宮本）

・ 然<sup>止天</sup>頻<sup>利</sup>不可懸<sup>須</sup>是<sup>毛</sup>隨時<sup>比</sup>可依座事也

（猪熊本）

・ 然カリトテ頻<sup>類</sup>ニカクヘカラス是モ時<sup>隨</sup>ニシタカヒ座ニヨラサル事也

（岩瀬片仮名本第五十八丁裏八行目、左右の小字は朱書き入れ、以下同じ）

なお小異は存するが、ほぼ真名本本文が修復されよう。これ以上例を連ねても事情は変わらないので、書き入れと真名本本文が重なる例はここまでとする。注意すべきはむしろ書き入れによって意味不通となる場合である。

箒ハ詞<sup>不消</sup>キエズツマヒラカニ聞ル也

（岩瀬片仮名本第六十丁表四行目）

「ツマヒラカニ」の箇所「祥」の字が宛てられている。本文通りならば「詳」字が適当である。対応箇所、伏見宮本は次のようである。

箒はことはきえず、つまひらかにきこゆる也、

（伏見宮本）

岩瀬片仮名本と同じである。この部分、真名本は

箒<sup>波</sup>詞<sup>不消</sup>祥<sup>不</sup>聞也 （猪熊本・岩瀬真名本とも）

とあって、岩瀬片仮名本の書き入れが単なる誤字ではないと知られる。こうした例は一例ならず散見する。次の例はさらに特異な例といえるだろう。

右所記之書失歟（岩瀨片仮名本第八十五丁表五行目）

この「書」字右傍には朱で「年」と注されている。ここは「記してあることは、書き間違ひなのか」と疑う文脈であつて、「年」の書き入れは、大いに疑問である。この部分、岩瀨真名本は楷書体で「書」字を記しており、この朱注とは関係ない。問題は猪熊本の書体である。猪熊本はこの箇所、図のように「書」の「日」を省画した書体で書かれている。この文字ならば「年」字と見誤る可能性が大い

み所記之書失歟

にあり得る。仮説としては、岩瀨片仮名本の朱書き入れは、猪熊本に近づいてくるのである。もう一例掲げよう。

風香調絃合中有（岩瀨片仮名本第六十九丁表八行目）

本来割書だが、一行に開いて翻字した。この傍線部左傍に「今の中間」と朱で記されている。ちなみにこの傍線部、伏見宮本は「合ノ中有」、岩瀨真名本は「今乃中有」とあつて「今」字を見消して「合」と注記している。読み下せば「風香調の絃合の中に有り」とでもなろうか。つまり岩瀨片仮名本書き入れは明らかに意味をなさないのである。これを猪熊本は「合の中有」としているが、「合」字は形が崩れて「今」字にも見える。また「間」字には、崩して「有」に形が近づく字体があり、加えて「の」字は「乃」字を字母とする仮名ということで岩瀨片仮名本と一致して

いる。意味をなさない岩瀨片仮名本の書き入れは、猪熊本に依らない限り生じ得ない誤りなのだ。

このように見てくると、岩瀨片仮名本の朱書き入れ、すなわち實満本は必ずや猪熊本と関係を持っていたと考えざるを得ないのである。

#### 四、近世における真名本の伝流

ここで前に保留しておいた奥書1の内容について、もう一度考えたい。具体的には「菊亭大納言公規卿令所望書写者也」の解釈である。

結論から言えば、私は「公規卿が（私實満の）願いにより書写なさった」と理解したい。

「所望」と「書写」とが別の主格を取り、やや無理のある物言いになることはもちろん承知している。しかし逆に「公規卿が所望なさつて」の意味とは、どうしても考えにくいのである。「菊亭」とは言うまでもなく藤原氏閑院流西園寺家の庶流「今出川家」の別称。つまりここは今出川公規である。奥書に記された「延宝六年極月（十二月）五日」、彼は正二位権大納言で前月十九日には右大将に任じられたばかりであつた（『公卿補任』）。これに対して所望者「實満」は今出川家よりはるかに家格の低い「花園家」の人物である。公規より九歳の年長ながら、この年すでに散

位従二位、極官は参議。もし「令所望」という行為が公規のものならば、二人の関係から言つて当然強く敬意が働くべきところである。「御所望」とでもあるべきだろう。無論「令」字にも敬意のニュアンスが含まれるが、「所望」にかかるすると座りの悪い表現になろう。それに公規が「所望」したのであれば、奥書は彼自身が記するのが普通である。また別の角度から言えば、今出川家は琵琶を家芸とした。『胡琴教録』のような専門的な書を所有していても不思議はない。更に『国史大辞典』によれば實満の死後、花園実廉が桂宮家仁親王より琵琶伝授を受け、その記録『琵琶両曲復伝之事』が書陵部に残っているという（「花園家」の項）。恐らくは公家としての権威を得ようと花園家の方が熱意を見せたものに相違なく、實満の『胡琴教録』書写もこの線上で捉えれば、矛盾なく説明できると思う。「令」字の解釈には問題を残すが、「公規卿が（私實満の）願いによつて書写なさった」の意と解釈しておく。

とすれば問題の猪熊本は近世前期、今出川家に所蔵されていたか、さもなくばやはり筆跡まで忠実に猪熊本を再現した複製本が今出川家に存在したと考えざるを得まい。前稿で岩瀬真名本について考察し、そこに「公久卿傳來之巻物」が対校されている事実を見出した。この「公久」はやはり今出川家の人物で、「公規」から数えて八代目となる。「此一巻」と「公久卿傳來之巻物」とは同一の本であろう。

前稿で確認した「公久卿傳來之巻物」が、彼の八代前の公規の代にはすでに今出川家に所蔵されていたものと判明したわけである。

### おわりに

伝本の必ずしも多くない『胡琴教録』のような、ある意味での稀書が今出川家に所蔵される。それは決して故ないことではない。

先に述べたように今出川家は代々琵琶を家芸とし、その技芸の保持と継承とに携わってきた。これは今出川家を生んだ西園寺家の事情に起因しているだろう。『胡琴教録』には十二条にわたる裏書が見えるが、このうち五例が「孝道云」と書き出されている。この「孝道」は、鴨長明のいわゆる琵琶秘曲づくしの一件に深く関与した、琵琶西流継承者・藤原孝道であろう。つまり『胡琴教録』の伝流の初期の段階で孝道周辺の人物が関与していたと考えられるのだ。伏見宮旧蔵『琵琶血脈』によれば彼の孫・藤原孝時が、『とはずがたり』の「雪の曙」として知られる西園寺実兼に琵琶を伝授している。『胡琴教録』伝流のかなり早い時期から、琵琶西流師範家を介して、西園寺家がこれに接する機会は十分にあり得たのである。実兼の琵琶は、のち光厳院や後崇光院をはじめ、堂上の人々に伝えられてゆく。



今出川家の琵琶の道における地位を支えたこの西園寺家の権威と格式は、『胡琴教録』の重要な伝本を所持するのに、申し分のない条件と言えよう。

岩瀬片仮名本については他にも述べるべきことが多いが、紙幅が尽きてしまった。朱書き入れを手がかりに真名本の伝流を考察したところで、本稿を閉じる。

付記 岩瀬文庫所蔵の二本については、原本の調査メモと写真に依っている。調査に際して種々ご厚情を賜った西尾

市岩瀬文庫当局にお礼申し上げる。またその他の伝本は、猪熊本については古典保存会複製第八期『胡琴教録 下』、伏見宮本については『伏見宮旧蔵楽書集成 二』（図書寮叢刊）に基づいた。引用に際しては私意により適宜表記を改めた場合がある。

## 注

(1) 拙稿『胡琴教録』真名本の伝来―岩瀬文庫蔵本をめぐって―（古代中世国文学第九号、平成九年三月）以下「前稿」とは、すべてこれを指す。

(2) 拙稿「内閣文庫蔵『胡琴教録』（荻生徂徠校正本、乾坤二冊）について―伝本研究・本文校訂に向けての覚書―」（国文学攷第一四七号、平成七年九月）